

第5章 マアーン王朝

今回はP.53～138までのイエメンの諸部族及びその居留地の解説を他のページに譲り、イエメンの最初の古代王朝であるマアーン王朝の姿に迫っていく。

イスラム以前のイエメンの諸国家

歴史家達はイエメン史を次の様に分割することに同意している。即ち：

- 1－イスラム以前のイエメン史
- 2－イスラム以後のイエメン史

既に読者がこの本の最初のページの概略で見てきた様に、幾つかの余儀せざるを得ない空白部を挿入しながらも、この上記の分割を私は追求してきた。そしてこれが1番目の区分である。

その中には「イスラム以前のイエメン諸国家」、即ちイエメン古代文明史がある。その著名な国家は3つあり、それは「マアーン」「サバア」「ヒムヤル」である。

そしてこれ等よりも重要度は少ないものの幾つかの国家や首長国がある。その中には、「カタバーン」「アウサーン」「独立ハドラマウトーこの国はヒムヤル国に吸収される以前の独立時代のものを指す」「サムイー」「アルバウ」「ジャバー」「トゥフイード」「マラーシド」「ラアヌ」等があり、後に述べる。

これ等の国家や首長国は大国への併呑に帰着するのであるが、サバア国がその大部分を含んでしまい、それからその版図を拡大したヒムヤル国が到来する。従ってかつて自然上のイエメンにあった全ての諸国家や首長国をサバア国やサバアが含有したものも含め、ヒムヤル国が統合することになる。

これ等の古代イエメン諸国家（即ち特に大国の）時代には繁栄と富裕が一般化し、イメン諸地域において安全と安定が支配的になった。イエメン人達は諸地域において農業や灌漑そして建築工学の知識に卓越したものを示し、ダムを建設し、高層建築物や城塞を建て、運河や用水路を掘り、砂漠に道を、山々にトンネルを切り開き、段々畑を作り、鉱業や産業化によって出来たこれら全ての建築物が必要とするものを維持していた。

これ等の事柄に付け加え、立法の発効や法律の制定等が、行政、軍事、商業、農業、灌漑に関する諸事項で行われた、また同様に彼等は、集団のメンバー間や諸集団間の相互協力のシステムを、様々な集団間の建設上や経済上の相互信頼を実現することを目的として築き上げていた。

この相互協力のお蔭で、彼等は自らの文明や巨大な建築物を建設しえ、それ等の遺跡は未だに、イエメンの地域の多くで我々の眼前に存在している。

また彼等は貿易活動を行い、イエメン国境の内外における陸海の交通路を防衛したり、また彼等はアジア、アフリカの諸国間の陸海の運搬の責任を全うする事に長けていたが、その運搬手段の防衛の

為に陸海の交通路を安寧なものとしていた。

イエメンの諸大国が、別のイエメンの諸国家や首長国を窺い、その版図を拡大しようという野望を持った時、戦争が起こり、治安は混乱し、イエメン人達の状態は悪化し、交戦国はこれによりダム（既にダムはイエメン全土に広がっていた）に注意を払ったり、保持したりすることから遠のいてしまった。従って農作物の源が少数化し、彼等を弱体化させた。そしてローマ人やエチオピア人やペルシャ人等の外国人達がイエメンを侵略し、イエメン人達の手から彼等の最も重要な源の一つである海上貿易路を奪い去るチャンスを与えることになった。そしてこの事全てがイエメン人達をイエメン国外へと次々と起こる移住へと強制するのであった。

災難と破滅の状態が続き、イエメン国外への移住も継続していた。そしてとうとうイスラームが到来し、イエメン人達は従順にこの呼び掛けに呼応した。それはユダヤ教そしてキリスト教、この2つの宗教は変節の前は唯一の神の宗教であったが、それ等がイエメンに到来して以来、崇高なる神を信仰していたことによって、精神的な準備が整えられていたためであった。イスラームへの呼応は彼等同士の間で、また彼等とペルシャ人達の間での紛争や戦争の迷宮から逃れるためのことであり、またイエメン人達の多くがその当時まで信仰していたキリスト教とイスラーム到来時にイエメンを支配していたペルシャの多神教との間で存在していた紛争に決着を付けるためであった。

イエメン人達は初代カリフのアブー・バクル及び（第二代カリフ）信者達の長オマル・ブン・アルハッターブやウマイヤ朝の歴代カリフ達により発せられた世界の様々な地にイスラームの旗を掲げることに参加するための呼び掛けに呼応した。

従ってこれにより安寧と安定が、イスラーム国家の諸州に成立した宗教的・政治的統一の下でイエメンに戻って来た。そしてこの事は特に聖なる使徒の時代や正統カリフ時代のイスラームの黎明期においては顕著であった。ただし（第4代カリフ）アリー・ブン・アビー・ターリブがカリフの時代に、ムアーウィヤ・ブン・アビー・スフィヤーンが彼に造反し、イエメンにブスル・ブン・アルター・アルアーミリーを派遣し、イエメンにおいて流血惨事を引き起こし、恐怖と混乱を広めた時代は除かれる。僅か一年間の彼のイエメンにおける滞在中に、イエメンにおけるムアーウィヤの統治の強化を試みつつ陸海より侵略をなした。

しかしアリー軍の軍隊とアリーに協力するイエメン人達によって敗北を喫し、ブスル・ブン・アルターが取ってきた軍事力による政策は、最終的に成功しなかった。

この様に軍事力を目的達成の手段として採用した個々の目論見は、イエメンやその他の地域でも歴史的に失敗に帰したのである。

マアイーン王朝

研究者の大多数は、カハターン・ブン・アービル（ユダヤ訳注：ヤアコーブの第4子）ブン・サーリフ・ブン・イルファフシャズ・ブン・サーム（注1）・ノハ（ノア）がイエメン人の祖で、また最初に知られる政治的統治はマアイーンの統治であると、主張している。

(注1) サームはセム族に関係し、彼等からアラビア半島のアラブ人、アッカド人、バビロニア人、カルディア人、アッシリア人、カナン人、フェニキュア人、アラム人、ヘブライ人、チオピア人等が分派している。

そして或る歴史家達の見解であるが、恐らく包括的科学探査がマアーンよりもサバア王朝がその存在においてより古いものである、と解明するであろうと述べている。また歴史家達の一部は、マアーンの統治は紀元前14世紀に始まった、と主張しているが、これは発見された刻文の中で最も古いものがこの年代に帰着し、そしてそれがマアーンのものである事を根拠にしている。

サヌアの北東のアルジャウフはマアーンの最初で主たる地域であった。

アブー・ムハンマド・アルハサン・ブン・アハマド・アルハムダーニーは、アルジャウフが北方をバート、アッシュゲフ、アッルーズの山々、南方をシリヤームそしてヤームの山々に囲まれた広い大地に位置していた、と定義している。

アルジャウフには4つのワーディ（涸れ川）が注いでいるが、その中で最も重要なものはアルハーリドであり、他にマザーブ、ハブシュ、マンバフがある。そして個々のワーディは特別な水路を持っている。

マアーン王朝の首都はといえば、それは都市マアーンであり、マアーンより後の時代を通してはクルナと呼ばれていた。

マアーン王朝の諸都市の中でその景観を今日まで残しているものに、アルバイダーがある。この都市はナシュクとして知られていた。そしてアッサウダーという都市も残っており、この都市はかつてナシャーンとして知られていた。そしてこの都市は、産業都市であったが、瓦礫の山から研究者達は鉱物の原石や鉱山採掘や鉱石から道具を作り出す際に使われた器具等を発見した（注2）。

(注2) 「イスラーム以前のアラブの歴史に関する詳細」 Dr. ジャウワード・アリ著 第2巻 P.118

またバラケシュという都市が残っているが、これはかつてヤスル、アルハラム、クムナ、ラシャーン、またはラウサーンとして知られていた。この都市はアルジャウフルアスファルの中心地のアルハズムの中央部から数キロにあり、東から西へほぼ一直線上に位置するアルジャウフルアスファルの平原に集中している他の都市群とは離れた地域にある。

都市マアーンはアッルーズとヤームの二つの山のほぼ中間の距離にあり、東はアッブウルハーリー砂丘帯へ導かれる広大な平野にあった。また他の諸都市は都市マアーンよりもヤーム山に近い西側にあった。

マアーンの諸都市が建設された地域が砂丘地帯であったにもかかわらず、これ等の諸都市は造成された土塁の上に建設され現在もかつての様に存続している。またこれ等の諸都市の廃墟は未だに何千年前からその土塁の上に立っているのである。

またアルジャウフにおいては、上述の諸都市より知名度が少なく、しかもその外観が砂に埋もれた諸都市がある。それ等の中には（注3）、バイハーン、サラカ、イブナ、マクアム、バクバク、ルークソ

他のものがある。マアイーンのバイハーンは今日知られているバイハーンではなくカタバーン地域に属するものである。

(注3) 「イスラーム以前のアラブの歴史に関する詳細」 Dr. ジャウワード・アリ著 第2巻 P.119

アルジャウフを取り囲む山々は、またイエメンの遺跡が豊富な所でもある。マアイーン遺跡の研究者達の中で最も顕著で最古参である東洋学者のハーリーフィーは、1870年頃パリの美術工芸アカデミアを通して派遣された人物であるが、彼はアルジャウフで都市マアイーンの瓦礫を発見した。そしてその上にマアイーン時代にかつて使用された「アルムスナド」文字で書かれたマアイーンを読み取ったのである。

ハーリーフィーがアルジャウフ地方で発見した刻文の数は700刻字にのぼる。その内訳は、都市マアイーンのみで97刻字、またバラケシュでは154刻字、そしてアッサウダー70刻字であった。

マアイーンの遺構はマアイーン王朝の栄光の象徴が存在している、と描写し得る。都市マアイーンは正確にはアルハズムの街の東方7,5Km の距離に位置し、四方がなだらかな土の小丘陵の上に横たわっており、約15m地表より突出している。また東から西へ長方形の形をしており、縦400m、横250mである。

しかしドトルフ・ニールセン（注4）の記載によると縦780m、横240mである。そしてその周囲を多くの塔を持った巨大な城壁が囲んでいた。また門が2つあり、その1つは東向き、またもう1つは西向きである。一方その城壁は高さが15mあったと見積もられている。

(注4) 「古代アラビア史」終章 ドトルフ・ニールセン著 P.14

私は多くのマアイーンの諸都市の遺跡を訪れたが、1962年に私はこのマアイーンの首都の遺跡を探訪し、私は都市マアイーンの城壁が、平板にされた赤い石で、しかもその石はそこから遠くはなれた山々から運んでこられたもので建設されたことを見出した。

そしてこの城壁は非常に見事であり、精緻で、堅牢であった。そして長方形に近い楕円形に造られており、城壁の基盤になるところには四角い塔を有していた。そして個々の塔の面積は凡そ城壁の塔と別の塔との間の面積にほぼ等しいのである。

そして塔そのものと塔と塔の間の城壁には正確に平行に彫られたマアイーン文字の刻文があり、その城壁の素晴らしさを増大させている。また城壁の凡そ下半分を砂が覆っており、同様に諸門もまた覆われている。そして都市の内部は廃墟や瓦礫が積み重なっている。また内側からも諸門は塞がれていて、城壁の外側から砂の上に、もしくは城壁の残りの上を登り、その頂上から都市の内部の廃墟の山へ下りる方法以外に内部へは容易に入れない。

そして都市の内部には古い建築物や古代マアイーンの寺院の塔頭の遺跡が数多くある。また同様に井戸やイスラームのモスクがあり、この事は後年のイスラームの時代にも住人が住んでいた事を指し示めしている。

ハーリーフィーの言葉通りに、全てのアラブの国々に稀に見る遺跡とか廃墟群の多さにおいて、ア

ルジャウフと競合出来る場所が有るわけではない。従って、古代史の研究者達はアルジャウフに多大なる希望と価値ある財宝を見るのである。彼等にとってその国の歴史巻物は解き明かされていくものかもしれない。また同様にイエメンと係わりを持ったり、関係を保持した別の諸国についての歴史も解き明かされていくのかもしれない。というのはイエメンには、かつて古代世界の歴史において重要な役割を持ち、名声を博した重要な都市があったからなのだ。

ムハンマド・タウフィーク教授はアルジャウフをエジプトのファウアード I 世大学の代表者として 1944年当時訪れた。訪問の理由は「イエメンにおける考古学研究史」章で先に指摘した様に、イナゴの移動とその次世代増殖の研究であった。彼はこの機会を利用してアルジャウフの遺跡地帯を訪問した。また前述の年の翌年、アルジャウフへ2度目で最後のものとなる訪問をなしている。

そして彼はその地方の地表を研究し、アルジャウフの遺跡の装飾や刻文そして刻字を写真撮影した。また彼はそれ等の研究をまとめて、「イエメンのジャウフにおけるマアーン遺跡」と題する書物をカイロ・オリエント考古学フランス・アカデミー研究所から発刊した。前述の彼の書物の中で、ムハンマド・タウフィーク教授がマアーンの遺跡における刻文について述べている事の中に次の事がある。

即ち「刻字の発掘研究は、それが建築において石が組み立てられた後、造られたものであることを解明し、従って建築は非常に優れた技量を持つ職人達の手によって、また精密な器具を介して造られたものであることを表している。即ち文字の石は交互に整然と並び、その直線は平行を保ち、文字間の距離の尺度は均衡であり、刻字の彫りの深さは全て均一である。

もしこの事が何かを指し示しているのであれば、それはマアーンの人々が優れた芸術と完璧な嗜好に関して到達した能力を正に示している。そして彼等が刻文の鍛練に関しては、彼等が活躍する以前の時代から長い段階を経た後になって初めて、刻文に関する素晴らしい熟練の発展に到達し得たに違いないのである」。

ムハンマド・タウフィーク教授は付け加えて、古代イエメンの建築に関する外観を次の様に描写している。即ち「建築物の石は一般的に知られている塗装の種類のかなるものも使われず、色彩は排除されている」。

マアーン領土外のマアーン人達

イエメンの自然的領域外でのマアーン人達に関して言えば、イエメン古代史の研究者達の1人であるヘンリーは次の様に述べている。

マアーンの影響はその時期を通じて地中海岸やペルシャ湾のイラン海岸やアラビア海そしてヘジャーズ地方の高原地帯にまで達している。特にヘジャーズ地方の涸れ川であるアルフラートの近郊のアルアラーやアッサファーそしてハウラーンアッシュームにおいて研究者達が発見したマアーン朝の刻文や刻字をその証拠としている。

また同様にドトルフ・ニールセン教授は「イエメン古代史」の終章（注5）、ファウワード・ハスナ

イン教授がその補完をしているのであるが、次の様に述べている。即ち「イスラーム以前のアラブの文化的中心地はその南部(イエメン)に存在していた。

(注5) 「古代アラビア史」終章 ドトルフ・ニールセン著 P. 41

そしてこの事は、地理的諸理由のみならず、南アラビア地方において顕著な商業上及び経済上の諸要因のためであった。此の事は、インドの商品や香水や乳香といった地域的な収穫物やその他の物が、地中海沿岸の諸民族の元へ南アラビアのキャラバンの背によってもたらされたからであった。

そして彼等の交易路は、マッカ、マディーナ、アルアラー、マアーン、ペトラを通過しながら紅海岸のヘジャーズ地方のルートを経由していたのであった。この交易路は、それを警護し、そこでの貿易の治安と平和の維持を保証するために活動する者を必要としていた。即ち、今でも我々が見ることの出来るのであるが、ヘジャーズ地方のマディーナ北方のアルアラーにおいてマアーン王朝の植民地設立が必要とされたのであった。そしてこの植民地は武装したマアーンの兵士達が集結している場所でもあった。

ウエントン(注6)は南アラビアの刻文において言及されているマアーン・ミスラーンもしくはマアーン・ミスルの名で知られた植民地の北方で、マアーン人達に関するマアーンの刻文の中で25の大きな破片と約50に及ぶ落書きを発見した。

(注6) 「古代アラビア史」終章 ドトルフ・ニールセン著 P. 42

そしてこれ等の刻文から結論付けられるのは、北方のマアーン人達は南方のマアーン人達が本来の故国で知識を得、使用していたマアーン文体や宗教を使用していた、ということである。そしてその神々とは、我々が彼等の信仰対象としていた物の中に見いだした様に、イシュタル、ワッド、ナクラブ神の三身一体神なのである。

ファウワード・ハスナイン教授が「古代アラビア史」(注7)の補完で、イエメン国外のマアーン人達の影響力を強調し、次の様に述べている。

(注7) 「古代アラビア史」終章 ドトルフ・ニールセン著 P. 369

即ち「幸福のアラビアがセム系の人々の本来の祖国であろうがなかろうが、マアーン人達は南方の民族であり、そしてもし後にアラビア半島やその外に広がって行ったのであれば、我々はエジプトやギリシャの諸島にその痕跡を見出せるであろう」。

またジャウワード・アリー博士は、前述の彼の著書「イスラーム以前のアラブの歴史詳説」(注8)の中で次の様に強調している。即ち「アルジャウフやヘジャーズ地方のアルバルカー路にあったマアーンの植民都市ダイダーンそしてエジプトのギザで発見された諸刻文は我々の考えを支援してくれている。

(注8) 「イスラーム以前のアラブの歴史詳説」 第2巻 P. 76

またギリシャの諸島の1つであるドゥブルス島で発見された別のマアーンの刻文は、紀元前2世紀に遡れるのであるが、この領域において我々が将来獲得出来るであろう最大限の知識をもって我々の研究を支援してくれている。故に我々は殆どのマアーン朝の王達の名前をそこから取り出すことが出来たのだ。もし、これがなければ、我々のマアーン人達に関する知識は非常に乏しいものになっていたであろう」。

ジャウワード・アリー博士は、前述の彼の著書「詳説」（注9）の中で次の様に付け加えている。「マアーン王朝の研究者達の大部分はこの地域（アッダイダーン地区）やその近郊の領域はかつてマアーン王朝の一部であったり、それに服従する領域であった。またマアーンの諸王達は彼等の名の下に知事達を任命していた。そして彼等の階級は『カブル』という階級であり、即ち彼等の王国を『マフハド（行政区）』に分割する方式において言うならば、『カブル』は『偉大なる者』を意味していた。即ち各『マフハド（行政区）』にはカブルがいて、彼が王の名の下に最高レベルの問題や首都に送る税金の徴収や治安維持に関する統治権を握っていたのである」

（注9） 「イスラーム以前のアラブの歴史詳説」 第2巻 P. 121

マアーンの諸王の名の下に統治していたカブルの名前が記載された刻文が発見されており、この事はマアーン王朝が今日知られている地名で言うならば、ヘジャーズからパレスティナまでを支配し、またこれ等の領域が当時マアーンに服属していた事を意味するのである。

また付け加え次の様に述べている。即ち「上述の意見を述べる者達は、その領域に対するマアーンの統治は、マアーン王朝の初期、紀元前1000年以上前のことであり、その諸王の権力が弱まった時には、マアーンのヘジャーズにおける支配力は縮小し、マアーン・ミスラーンもしくはマアーン・ミスルの名で知られた地域でのみ影響力を残し、これ等の北方地域のマアーン人達の権力は、サバア王朝がマアーンを征服したことにより、弱まっていくことになるのである」。

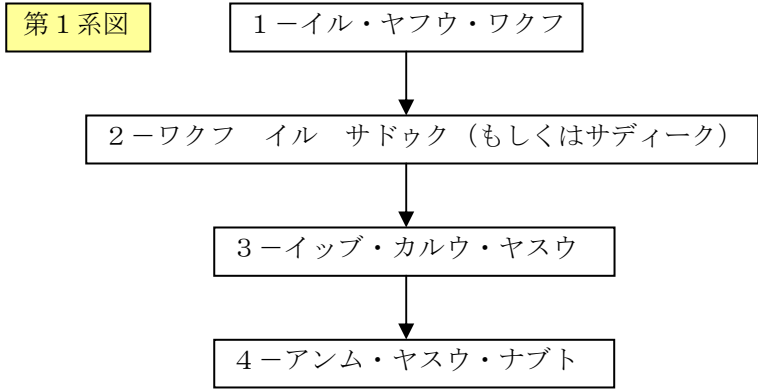
イエメンにおけるマアーン人達は文明に多大なる参画を成した。そしてアルジャウフのアルハーリド川の利用や彼の地で灌漑設備を整えたことから得る利益によって、その時代において傑出した能力を示したのである。またこの灌漑施設の整備はアルジャウフ地方の中心地をその時代の最も豊かな地域の一つに変えたのであった。

マアーンの諸王

マアーンの諸王に関しては、27王の名前が発見されている。そしてマアーン王朝の初期に王は「マズワード」と冠され、後にマリク（王）の称号を冠するようになる。

研究者達の間では、幾人かの名前や付加された別の称号に関して、またその即位の順番について異なった意見がある。それ故、この件に関しての疑念を差し挟めない包括的な科学調査の完了まで、王達の人数やその即位順に関して確信は得られないのである。

そこで私はフィルビーがまとめた5系統23人の王のリストに言及するだけで納得しようと思う。



1-イル・ヤフウ・ワクフ

「ワクフ」の意味は「応える者」もしくは「従う者」である。彼の名前はアッサウダーの市街地、即ちアルジャウフにあるマアイーンの都市の1つ、ナシャーンにおいて発見された刻文に言及されている。またそこにはマアイーン王である。

イル・ヤフウ・ワクフとマアイーンの人々が「アンム」神の神殿に自らの手によって誓約や贈り物をしてそれにより彼に近づこうとして犠牲等を捧げたことが言及されている。

また「ラシュウ」と呼ばれる神殿の神官や守護を担当する者がこれらの贈り物を受け、神殿の名の下に最終的に受諾したと記されている。またバラークシュ、ヤスルにおいて発見された刻文においても彼の名前が記されている。それは彼の時代に建立された時のことであり、彼及び彼の息子ワクフ・イル・サドゥクが2人の名前による吉兆と建立の歴史を確認する目的で刻文を刻んだのであった。

2-ワクフ・イル・サドク (サディーク) ・ブン・イル・ヤフウ・ワクフ

「サディーク」の意味は「信頼」、「公正」、「真実」である。彼の名前はクルナーで見つかった刻文において発見された。

3-イップ・カルウ・ヤスウ・ブン・ワクフ・イル・サドゥク

「ヤスウ」の意味は「実行者」もしくは「誠実者」である。彼の名前はヘジャーズ地方のアルアラで見つかった刻文において発見された。

その刻文は「ガリート」家の男が、アウス・ブン・ハイユ (もしくはハイ) という名の人物から土地を買った折りに書かれたものである。そしてこの誓約によって彼は、ナクラハ神やその他のマアイーンの神々に誓約文を提出している。

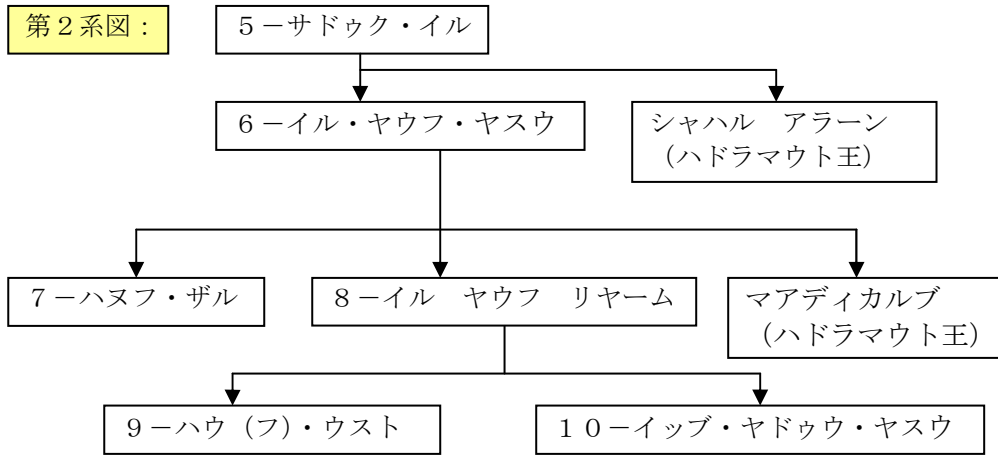
またこの機会にイップ・カルウ・ヤスウ王の名前も言及している。そして王を、妬みの目や彼に敵対しようとする全ての事柄から守るために、その刻文に庇護と保護を明記し、マアイーンの神々にその刻文を取り去ったり、壊したり、悪意を付随させたりする者全員に紙の復習が下る様に祈っている。

4-アンム・ヤスウ・ナプト・ブン・イップ・カルウ・ヤスウ

「ナプト」の意味は「光を放つ者」である。彼の名はマアイーンの都市の1つであるヤスルにある

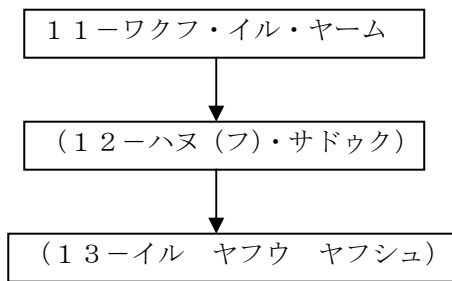
イスタル シャルクン神の神殿に土地を寄進するために、マアイーンの神々にそれを遺贈する際に記録された刻文に記載されていた。

フィルビーが約20年と推定している空白の期間、誰が統治したか分かっていない。またこの20年というのは、彼がいつもやっている各王の統治期間の平均値であるが、上述の空白期間は紀元前1020～1040年にあたる。

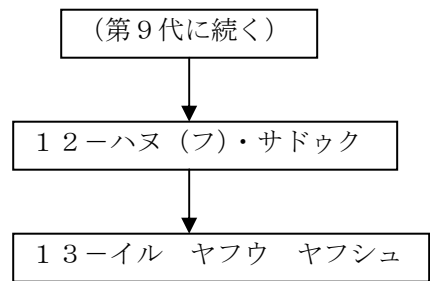


第9, 10代以降の後継者は、フィルビーとアルブライトにより意見が異なっている。

アルブライト説



フィルビー説



(注：第12, 13代目の王の系譜は定かではない)

5-サドゥク・イル

彼は個人でマアイーンとハドラマウトの王座を手中にした人物であり、紀元前1020年頃統治していた。また彼はハドラマウト出自の王である。

6-イル・ヤウフ・ヤスウ・ブン・サドゥク・イル

彼は紀元前1000年頃マアイーンの当地に1人であたっていた。そして彼の兄弟であるシャハル・アラーンがハドラマウトを統治していた。

7-ハヌフ・ザルフ・ブン・イル・ヤウフ・ヤスウ

「ザルフ」の意味は「明確者」、「輝ける者」、「光を当てる者」である。彼にはマアディカルブと言う兄弟がおり、ハドラマウトの玉座を占めていた。ハヌフ・ザルフは紀元前980年頃統治していた。

8-イル・ヤウフ・リヤーム・ブン・イル・ヤウフ・ヤスウ

「リヤーム」の意味は「高位者」である。彼は紀元前960年頃統治し、マアイーンとハドラマウトの玉座を統合した。何故なら前述[7]のハドラマウト王マアディカルブ・ブン・イル・ヤウフ・ヤスウの子供達が、彼の死後、ハドラマウトを統治しなかったからである。

9-ハウ（フ）・ウスト（フワ・ウスト）ブン・イル・ヤウフ・リヤーム

彼は紀元前950年頃統治していた。

10-イップ・ヤドゥウ・ヤスウ・ブン・イル・ヤウフ・リヤーム

彼は935年頃統治していた。彼の名前は、都市マアイーンを出自とする刻文に記されていた。この刻文は「グラッツェルNo.1550」もしくは「フィルビーNo.192」と命名されているもので、クルナーの町の名士達が、この町の塹壕を改修し、城壁を修理し、そこに新しい区画を建設した際に書かれたものである。彼らはこの作業をマアイーンの神であるイスタル・ドウ・カブダン神、ウッド神、サクラフ神、またマアイーンの王に捧げる為に遂行した。

これは通常、建築の文書に明記されることであるが、この刻文は完了した作業の詳細やそれが成された場所、そして規模やその他の事柄が言及されている。またこの作業終了後に、上述の神々に犠牲が捧げられた事にも言及している。

またクルナーの町発見された別の刻文があり、「フィルビーNo.193」のマークで指摘されているものがあるが、イップ・ヤドゥウ・ヤスウ王の名前が述べられている。またこの刻文は、この時代マアイーン王国とハドラマウト王国との間の基本的な関係を指摘している。非常に重要な刻文の一つである。そこには次ぎの様に記されている。

「ハドラマウト王マアディカルブはハルフ城を寄贈することにし、彼の甥マアイーン王イップ・ヤドゥウ・ヤスウと彼の民であるマアイーンの人々にそれを与えた」。

また重要なマアイーンの刻文の中には「グラッツェルNo.1115」もしくは「フィルビーNo.535」「フィルビーNo.578」と番号付けられた刻文（注10）があるが、これらはイップ・ヤドゥウ・ヤスウ王の時代に遡るものであり、「ズヤムナト」と「ズシャーミト」との間に、即ち北方と南方との間に起こった戦争について語られている。そしてこの刻文は、非常に大規模なキャラバンが侵略の危機に晒されたことから救出された際に記録されたものである。

（注10） 「イスラーム以前のアラブの歴史詳説」 第2巻 P. 88

ウィンクラーは次ぎの様に主張している。即ち「ここで言う南とはマアイーン政権のことであり、北とはアラビア半島南部やダマスカスの地に支配力を及ぼしてきたアラビア人の政権を意味している。そしてアンム・サドゥク・ブン・フム・ウストとサアド・ブン・ワレク

の2名がこの刻文の記録を命じた。彼らはヘジャーズ北方のアルアラー地方のミスラーンの名士であり、この刻文はこの地域のマアーン人達の財産を平安ならしめ、キャラバンの人達の生命を守り、彼らの町クルナーの境までキャラバンをもたらすまで、その慈悲と加護でそれを包み込んだ神々に感謝するためのものであった。

「ヤムナト」の初めての記述

このテキストにおける「ヤムナト」と言う記述は、研究者達がマアーンやその他の古代イエメンにおける刻文における単語として発見した中の最初のもので、紀元前10世紀に遡り、非常に重要な歴史的眞実なのである。

と言うのはこの年代よりずっと後の時代のヒムヤル諸王に冠する際に使用されるまでは「ヤムナト」と言う言葉は耳にしない、と主張する人々を打ち負かすからである。

11-ワクフ・イル・ヤーム・ブン・フワ・ウスト

ジョン・フィルビーの意見に拠ると、フワ（ハウフ）・ウストの息子であり、またウエンデル・フリリップス派遣団の偉大な地質学者であるアルブライトの意見に拠ると、かれはイップ・ヤドゥウの息子である。

12-ハヌ（フ）・サドゥク・フワ・ウスト、またはブン・ワクフ・イル・ヤーム

アルブライトの意見によると、彼はワクフ・イル・ヤームの息子である。またアルブライトに対する別の意見としては、彼はイップ・ヤドゥ・ヤスウの息子である。

13-イル・ヤフウ・ヤフシュ・ブン・ハヌ（フ）・サドゥク

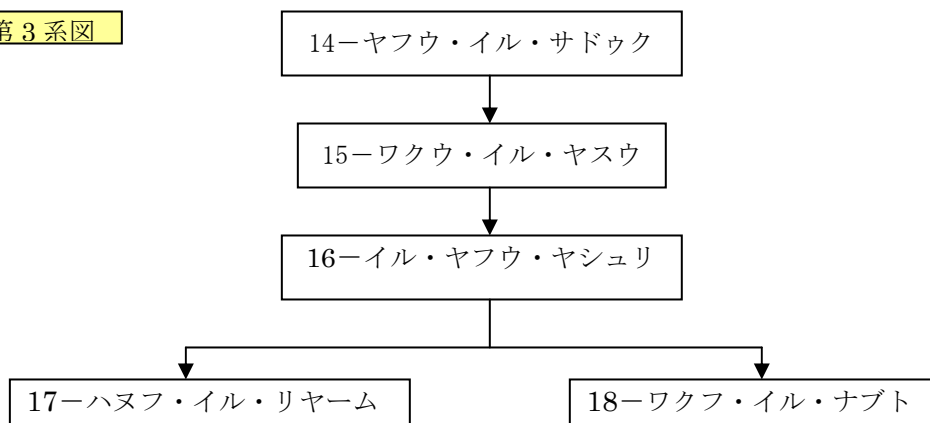
「ヤフシュ」の意味は「豪華」「尊大」もしくは「高位者」である。フィルビーが20年と推定している統治期間の習慣に従えば、空白時期は紀元前870年から850年にあたる。

マアーン統治者達の第2系図に拠って、マアーン王朝が既にこの時期独立を失い、ハドラマウト王朝に吸収されていたことが分かる。

と言うのは、この系譜の統治者達はハドラマウトの一族の出自であるからで、より正確に言えば、ハドラマウトの独立した王家の王達の中から出ているのである。

フィルビーの意見に拠るとこの第2王朝の時代は、紀元前1020年から870年である。この第2王朝の後に誰が統治していたか分からない空白の時期があり、フィルビーはその習慣に従い20年と推定している。

第3系図



第3系図は上述の統治者の如くであるが、彼ら全てはマアーン人である。この事は行く認可の研究者達が次の様に言及しているよりもより明確である。即ち、マアーン諸王の第2系譜の関係が、マアーンとハドラマウトの同盟関係であり、両王朝の住み分けの整った貿易関係によって花咲いていた、と言う事であるが、ハドラマウトはその貿易の中で、乳香の生産とその貯蔵、没薬、香水（これらは当時の信仰にとって、根幹を成す物質であった）。またマアーンはヘジャーズ地方北方のアルアラーにあった彼らの植民都市やそれに隣接する地域、大シリア地方、エジプトやその他の地域において、それらの物の商取引の役割を成していた。そしてこの事は両王朝の協力関係を築き上げさせるのであった。

と言うのは、この第2系譜のマアーンの諸王達はハドラマウトの出身であり、しかも第2王朝最初の王であったサドゥク イルから連綿と続くハドラマウトの王家の出自であった。そしてこの第2王朝の時期にマアーンはその独立を失い、ハドラマウトの王達がそこを支配していた。

しかしながらジャウワード・アリー博士は、サドゥク・イルがハドラマウトに支配されたマアーンの最初の王であると確信していない（注11）。そしてもし彼がハドラマウトの人間でないのであれば、マアーンはこの時期自らを支配して、その独立を失っていないことになる。

（注11）「イスラーム以前のアラブの歴史詳説」 第2巻 P. 82

一方アルブライトは、概してマアーンに関しては、一般的に研究者達の多くの意見とは非常に遠い見解を持っている。（注12）。それはハドラマウトの王達が紀元前400年頃に、マアーン王国を設立した人達である、というものである。包括的科学調査が、この問題や古代イエメン（マアーン）の歴史やその他の歴史的問題の見解の相違を解決することになるだろう。

（注12）「イスラーム以前のアラブの歴史詳説」 第2巻 P. 101

14-ヤフウ・イル・サドゥク（サディーク）

彼の名は、彼がハスン ヤシュバム一族の出自であり、彼がワクフ・イル・ヤフウの父である事を指して

いる。

15-ワクウ・イル・ヤスウ・ブン・ヤフウ・イル・サドゥク

16-イル・ヤフウ・ヤシュリ・ブン・ワクウ・イル・ヤスウ

「ヤシュリ」の意味は「真っ直ぐ行く者」である。彼の時代にマアーン政権は弱体化していた。この事はザムラーン一族が彼らの神殿に寄進した際に記した刻文に表れている。そしてその刻文に次の様に記されている。

「我々の主であるマアーン王であるワクウ・イル・ヤスウとその息子イル・ヤフウ・ヤシュリの時代にカタバーン王であり、また後者（イル・ヤフウ・ヤシュリ）の主でもあったシャハル・ヤジル・バガルジャブの名の下にこの寄進は行われた」。

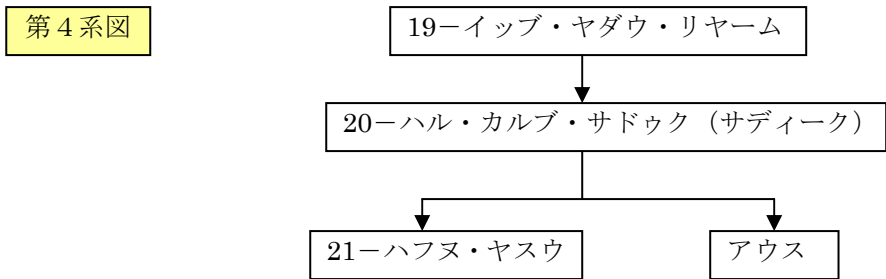
と言うのはマアーン王であるイル・ヤフウ・ヤシュリはカタバーン王の彼に対する支配権を承認していたからである。しかしながらこの事はマアーンがその独立を失っていた事を意味するのではなく、この時代の後も相当の期間にわたってその存在を維持しながら、その王朝は存続したのである。

と言うのは、マアーン王であるイル・ヤフウ・ヤシュリの名が別の様々な刻文に語られているからであり、その中には「グラッツェルNo.1144」や「フィルビーNo.353」等があり、諸塔の修復、改良そして運河や水路の掘削の遂行に際し、マアーンの神に捧げながら、人々に命令を下した、と記されている。また或る刻文にはドゥドゥンの北方やヘジャーズ地方の北のアルアラールに住んでいたマアーン人の名士や高官達が書き記したのものもある。

17-ハヌフ・イル・リヤーム・ブン・イル・ヤフウ・ヤシュリ

18-ワクフ・イル・ナプト・ブン・イル・ヤフウ・ヤシュリ

フィルビーが20年と推定している統治期間の習慣に従えば、紀元前770年から750年に空白の時期があり、この時期に誰が統治したのか分からない。



19-イップ・ヤダウ・リヤーム (注13)

(注13) 「イスラーム以前のアラブの歴史詳説」 第2巻 P.113

彼はドラクマ（ディルハム）と書かれたマアーンの硬貨に見出される。その硬貨には玉座に座る王の姿と足掛けに乗せられた彼の両足が描かれている。また顎鬚が剃られ編んだ頭髪を垂れ下げていて、右手には薔薇を左手には長い杖を握っている。そして彼の後ろに彼の名前が「イップ・ヤスウ」とあるが、これは前述の「イップ・ヤダウ」の事であろうと思われるが、非常に明白にムスナド文字で彫られている。

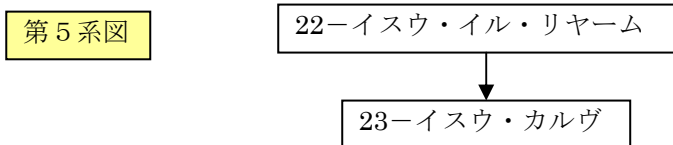
20ーハル・カルブ・サドゥク（サディーク）

彼の名前は多くの刻文に記されている。その中の一つは、マアーンのクルナーの町において発見され、イスタル・ズー・カブダン神の神殿に奉献した際のものである。

21ーハフヌ・ヤスウ・ブン・ハル・カルブ・サドゥク（サディーク）

フィルビーの意見に拠ると彼の兄弟のアウスが統治に参加していた可能性がある。

フィルビーが20年と推定している統治期間の習慣に従えば、紀元前670年に終了する空白の時期があり、この時期に誰が統治したのか分からない。



2

22ーイスウ・イル・リヤーム

彼は紀元前670年頃統治していた。

23ーイスウ・カルブ

彼は、フィルビーの意見に拠るとマアーン王朝最後の王であり、紀元前650年から紀元前630年まで統治していた。

「イエメン概説史」第1巻「古代史」p143-155